

「腹部単純 X 線診断」

〔著〕 永井 純・西岡 清春

聖マリアンナ医科大学教授

藤 井 正 道

日常診療において、診療のすすめ方はそれぞれの分野で一定の順序があるが、X線診断部門においては特にこれが基本であり、重要である。しかし、X線診断方法のめざましい進歩に伴い、とかく術技を重点にしたステップをふまないX線撮影が行なわれることがあるが、急性腹症の場合はもちろんのこと、腹部のX線診断に際し、第一のステップとして必要なのは単純撮影であることは、今さら改めていうまでもない。また日常、腹部単純撮影の件数は比較的多いが、いざ撮影フィルムを読影する場合、読影者に十分な知識がなければ、撮影フィルムはただ単なるフィルムベースでしかなく、患者にとってはむだな被曝となってしまうだろう。Susmanは、「We see only what we look for and we look for only what we know」と述べているが、まさに腹部単純フィルムの読影にあっても、どのようなポイントに留

意して読影するか、また正常像と異常像とに対する確実な知識をもっているか否かなどが基本として大切となる。

本書は以上の諸点に意を用い、単純フィルムを読影するにあたって必要な項目を網羅し、かつそれらに対する適切な解説を行い、さらにポイントとなる所見は、鮮明なフィルムを配して、学生のみならず、放射線医学に志すものや、第一線の実地医家に反覆してひもとく興味をおぼえさせるように工夫してあるなど、座右の書としてきわめて適切である。特に学生や、これから臨床医学の分野で活躍する若い医師のために、代表的なフィルムを基本に、永年の臨床経験に基づく教訓的なフィルムや極めてまれな症例をも加え、それらの特徴的パターンについての解説を行い、さらに、いわゆるサインといわれる所見の内容を、きわめて豊富にとり入れてある。

また一方、実地医家にとって、日常診療の忙しさの中で、なかなか1冊のまとまった本を始めから読むことはむずかしいが、本書は日常診療の合間に、また日常診療にあたって所見を読影する際に、座右の書としてきわめてハンディーであり、充分その要望にこたえられる内容を包含している。著者は、放射線医学の分野で、その体制づくりと、そのもっとも原点となる放射線医のレベルアップのために、並々ならぬ努力をはらってこられたが、今回このような著書を出されたことは、著者がいかに放射線医学の発展に努力しておられるかが感じられ、改めて深く敬意を表すると同時に、さらにひきつづき他のX線診断領域における、このような著書の出版を期待したい。

B 5 頁134 図39 写真111
¥6,000 ㊦240 医学書院刊